

20年前のキズなんですが なくなりませんか？



当山美容形成外科 当山 拓也

形成外科医になって20年以上経つが、上記のセリフを何十回と外来で言われたことだろうか。外来診療をしているとこれらの訴えで病院へ来る患者様は多い。

まず「20年前のキズ」と言われるが、これは残念ながら「キズ」ではなく「キズあと」になる。医学的には成熟癒痕と言って、これ以上の変化は望めない状態である。また「なくなりませんか」とか「なくしたい」と言われることも多いが、こちらも残念ながら無くなることはない。なぜならば皮膚の正常組織が破壊され癒痕組織に置き換わってしまっている状態だからだ。しかし患者様はそのような医学知識がある訳ではないので、順を追って説明しご理解頂く。私は形成外科医で学位のテーマも wound-healing だったのである程度の知識を有しているが、大変失礼ながら形成外科医以外の医師がこれらのことを理解しているとも思えない。従って一般の患者様が知らないのは当然である。

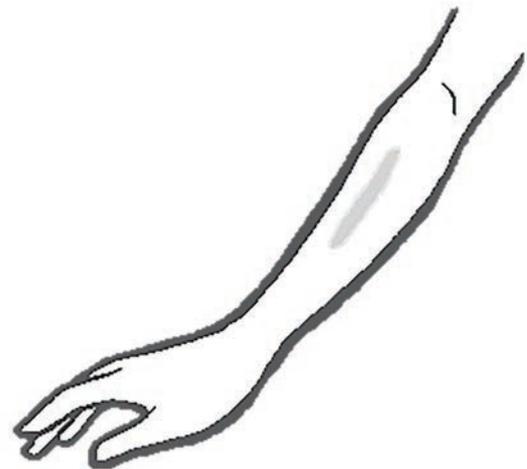
また「キズ」の治療は保険診療の範疇だが、整容改善目的の「キズあと」治療は保険診療の範疇ではない。それゆえ折角外来まで足を運んだ患者様が、自分の「キズ」が無くならない上に保険診療の範囲内で治療が受けられないと知って愕然とする姿はとても痛々しい。

実は「キズあと」をなるべく残さないよう「キズ」を綺麗に治療するにはいくつかのコツがあり、そのことを多くの形成外科以外の医師に知っていただくこと、また「キズ」を治す専門医として一般の人々に形成外科の認知度を上げることを目的に「キズケアの日」が制定されたと私は勝手に認識している。

「キズ」も「キズあと」も形成外科へ

「キズ」と「キズあと」は全く別物で、整容改善目的の「キズあと」治療は保険診療の対象外だが、ケロイドや運動制限を伴う癒痕拘縮は保険診療の対象となり、こちらは積極的な治療で功を奏する機会が多い。では整容的に問題となる「キズあと」をなるべく残さないようにするにはどうすれば良いのだろうか？実はこれには大原則がある。それは「キズ」をなるべく早く治すことである。逆の言い方をすれば「キズ」が治るのに時間が掛かり過ぎた場合、「キズ」は整容的な問題を残した「キズあと」となってしまふことが多い。

少し話はそれるが、「ニキビ」や「ヤケド」にも同じことが言える。近年「ニキビ」は保険対象の外用薬が数多く発売されており、早く適切な治療を行えば綺麗に治癒する。しかし適切な治療を行わず時間がかかると真皮に癒痕を残し陥凹変形が顕著になってしまう。多くの患者様が「ニキビあと」を「なかなかニキ



ビが治らないんです。」と言って外来にくる事例は大変多い。また「ヤケド」後の炎症後色素沈着を「しみになったのでレーザーで取って欲しい。」と言われることもまた同様である。

とにかく「早く適切に治療すること」が大原則なので、まずは形成外科をご紹介いただくのが一番良いと思われる。

創のプライマリーケアの重要性

まずは形成外科受診を！と申し上げたが、すぐに形成外科を受診することが可能な状況が常にある訳ではない。その際は最低限の初期対応だけで十分なので今後の参考にして頂きたい。

第一に創部を良く洗浄することである。その際生理食塩水の使用が望ましいが水道水でも構わない。大切なことは流水で wash-out して徹底的に異物を取り除くことである。場合によっては局所麻酔下に創部を洗浄することが後々の「キズ」の治りに影響する。

そして第二に適切な湿潤環境を作ることである。Too-wet はダメだし、Dry も創傷治癒の観点からあまり好ましくない。さまざまな創傷被

覆剤が発売されているが実は滲出液のコントロールが難しく、製剤を使い分ける必要がある。そのため創部とガーゼがくっつかないようにワセリンを大量に塗布して、それを一日 2～3 回程度交換するのも有用である。形成外科受診まで患者様本人にそのような創部の自己処置を指導してもらえるとありがたい。

「心のキズ」

誰もが失恋を経験したことがあるだろう。その時の処置を間違うとその「心のキズ」は後々ちょっとしたことで痛くなることがある。しかしそれは「キズ」ではなく「キズあと」なので誰かに舐めてもらっても治ることはない。早く治せば良かったものの、いつまでも未練がましく自分の「キズ」を放置していたために「キズあと」が残ってしまったに違いない。もしあなたが今失恋で心に「キズ」を負ったのであれば、「キズあと」にならないよう適切な湿潤環境のもとに素敵な人に巡り合えることを祈るばかりである。

